

## 振られて他を言う

データ工学 (株)  
喜多尾 憲助  
kitaoken@aol.com

長年にわたって、本誌の編集委員を務めさせていただいたが、本号限りで辞めることになった。核データニュースを年に 3 回、大相撲の本場所に合わせて出そう、といったのは故中嶋龍三さん（法政大）である。中嶋さんは本誌が JNDC ニュースと呼ばれた時代からの編集委員であった。今日では発行日に多少のずれを生じているが「専業」編集人に中川庸雄さんという、余人をもって代え難き人物を得て、ペースを守り弛まず続けている（今回の編集会議は初場所 6 日目に開かれた）。編集委員の仕事は、内容の構成を決めるとともに、適当な人に原稿をお願いすることである。当然のことながら、督促の役も果たす。僕はどうもこれが苦手で、つい穴を空けそうになる。商業誌ではないから刷り上りの頁数が多少減っても勘弁してもらえるが、自分がアイデアを出した欄に記事がないのは情けない。「顧みて他を言う」という言葉がある広辞苑によれば出典は孟子、答えに困った時など、左右を見回して、関係のないほかのことを言っておまかせ、ことと説明されている。原稿をお願いするべく周りにコンタクトしたが、誰にも断られ、仕方なくあまり核データに関係のない話だと思いつつも、駄文を弄し「埋め草」とした次第。「振られて」他を言うである。読者諸賢、もって了とされよ。

### 海外旅行術？

さて誰でも国外で失敗の一つや二つは当たり前であろう。失敗や勘違いは国内にいても起こる。無事に帰ればそんなことはグッドバイ！さっぱり忘れるに限る。もちろん面白いことも見聞きする。乗り継ぎのため早朝のチューリヒ空港に着き、洗顔・髭剃りのためトイレットに入ったときのことである。上半身裸になっている人がおり、顔を洗い首筋を洗い、さらに胸を洗い腋下に及んだ。各所を洗い終わると、巻いてある手拭タオルを床に引きずらんばかりに長々と引き出し、体を拭き始めたではないか。おそらく頭くらいは洗ったのではないか、もしすぐそばに件の「個室」があれば、全身を拭いたに違いないと断定できる。このタオル、手を拭いた後、次の人のために少し引き出しておくくらいのエチケットは知っていたが、これは得がたい経験であった。むろん僕も髭剃りの後、ささやかに顔を拭かせてもらったことは言うまでもない。余談だが、僕の知り合いで大きな病院に勤めていた医者によれば、病院にしばらく居座ったホームレスがいたという。朝になるとワイシャツを着てネクタイをキチンと締めているので、誰もホー

ムレスと思わない。確かに病院ほど住みよいところはない。栓をひねればお湯もでるので髭をあたるにもこと欠かない。冬は暖かく、夏は涼しく快適である。見舞い客も大勢出入りするし、夜は付き添いよろしく、待合室のベンチで寝ていても怪しまれることはなかったろう。上半身裸男はホームレスではないだろうが、24 時間オープン空港ならばホームレスが住みつついても不思議ではない。

もちろん言葉の上での失敗も多い。チューリヒ空港では免税店で **boarding pass** を見せろと言われても、理解できなかった。免税店でものを買うときに航空券を提示するというのを、このときはじめて知ったし、**boarding pass** なる文字がチケットに印刷してあることすら気がつかなかった。なにしろ生まれてはじめての外国であったから、完全に舞い上がっていたのだ。売り子嬢はこの人、馬鹿じゃないかという顔をしていたのも無理はない。予想もしないことを言われると簡単な英語すら出てこない。最近も、クレジットカードを使うさい、カードの読み取り機を出され「ピンクル」ナンバー（と聞こえた）を打ち込めと言われ、なんのことかまるっきり分からなかった。「暗証番号」のことだったようであるが、僕の使っているカードは暗証番号がない。これも予想もしなかった言葉を突然言われたために、まるで反応できなかった。結局現金で払ったら、「なんだ、持っているじゃないの」と先方もホッとした様子であった。

イスタンブールの魚料理屋には入り口に生の魚を並べているところがある。店先で目にした「ひらめ」の焼きものを食べることにし、**flatfish** と言い手まねまでして見せた。しかし出てきたのは期待に反してコチのような形をした長さ 15 センチほどの魚のフライで、しかも皿に積み上げてある。泣きなくなったが、その夜はこれを肴にラクという、アニスンの入った強い酒をやけになって飲んだ。後から知ったが「ひらめ」の英訳は **flatfish** で間違っていなかったが、ヨーロッパ産は **turbot** と呼ぶらしい。**baked turbot** とでも言えば正解だったようだ。**Coor's** という銘柄の米国产のビールがある。向こうに行ったとき、日本でいうようにクアーズと何回叫んでも相手にされない。後からきた人がドラフトと言って買っていったので、僕も真似してやっとな喉を潤すことができた。ラベルを眺めると、**Coor's Draft** とあった。コーと言うのが正解だったようだが、**made in** … をマデインという土地で柄である。他の土地でも通用するとは限らないかもしれない。朝日新聞にこんなコラムがあった。弘前の雪の夜である。街灯の下を黒マントがすれ違う。「どき」「ゆさ」、黒マントは声を掛け合って互いに反対方向に歩く。「どこへゆくのか」「ゆや（銭湯）よ」というのである。日本国ですら、こういうことがある。いわんや外国である。

1994 年某調査団に加わって、スウェーデン、フィンランド、ドイツ、スペインと回ったことがある。フランスのリヨンで開かれた原子力国際会議に出てから、各国の放射性廃棄物処理場を視察するというのである。リヨンといえば食の都と聞く。よきガイドブックをと丸善に立ち寄ったら **Berlitz** 発行の **European Menu Reader** というポケット版が目

に付いた。サブタイトルは“Guide to what’s on the menu, in the soup, under the sauce, in 14 European languages”。各章（国語）はそれぞれ発音ガイド、役に立つ表現、食べ物、飲み物という項目からなり、それぞれの英訳がついている。他に米国と英国（当然、この両国の章は食べ物と飲み物のみ）が載っている。「役に立つ表現」では、まず hungry の項で始まるので度肝を抜かれた。その最初の表現はいきなり、I’m hungry/I’m thirsty である。入り口でボーイが扉をあけた、そのときいきなり「私は飢えている。」などと言っているものだろうか、乞食と間違われ放り出されるのではないか、と日本人なら誰でもそう思うに違いない。だが hungry で飢餓という文字を思い浮かべるのは、貧弱な英語教育を受けたため、本当は「私は食事をしたい。」「お茶を飲みたい。」と言う程度の言葉遣いなのである。むろん、よれよれの服を着て橋のたもとに座り、I’m hungry といえば、「私は飢えている」のである。即座に購入し、旅行鞆に忍ばせたときは思わずにんまりしたものである。

しかし結論から言えば、これは全くといってよいほど役に立たなかった。本の名譽のために言うておくと、それはすべてこちら側の問題であった。第一に、どこへ行ってもたいていのレストランやビストロは暗く、文庫本大の本の活字は、虫眼鏡なしにはどうも読むことができなかった。プラスチック製のフレネルレンズを持っていったのだが透明度が悪く、やはり明るいところでないと使い物にならない。又食べ物の英語名や調理法が英訳されていても、普段日本にいて食べも、見聞もしていないため見当がつかないことが多かったからである。たとえば cream puff はシュークリームのことであるが、puff で思いつくものといえば、女性が鼻の頭をパタパタやるものぐらいしか知らない。さらに英和辞書を引くことになる。しかも、その辞書の字も小さい。定食ですら何品もある中から選ばなくてはならない。日本にいても、食堂に入ったときなど何を食べようかといつも迷うのに、さらに 2 冊の本を繰らなくてはならない。面倒なことこの上もない。先日 TV で、New England clam chowder というボストンあたりの食べ物の話をしていた。念のためこの本の米国の頁を当たってみたら、ハマグリを入れたスパイシーなミルクシチュウとあり、画面にはまさにそれが映っていた。海外で思い通りのものを食べるには、やはり普段の心がけが大切である。

団体旅行は今のところこの一回だけしか経験していないが、自分で重い荷物を持ち運びしないですむのには大いに助かった。出発の朝などは、廊下に鞆を出して置けばまとめて、バスに積み込んでくれるのである。この旅行では、夜パリに着き、翌日の午後リヨン駅から TGV でリヨンに向かうことになった。それまでの時間、エッフェル塔を遠望し、市内の目抜き通りを案内してもらいながらバスに揺られ、オペラ座前でいったん下車、各自勝手に昼飯をとることになった。添乗員氏曰く「フランスは昼の食事時間はたっぷりかけるのが、ふつうです。しかし今日それをやると、列車に間に合わない。なるべく簡単に手早く済ませてください。すぐそばに金太郎ラーメンという店もあります。」

何を食べたのか憶えていないが、出発時間に間に合ったことだけは確かであった。同行の士の中には、飯を食う時間も惜しんでルーブルへ行きビーナスを見てきたというすごい人もいた。

リヨンでは、一夕同行全員で会食をしたが、デザートチーズは出てこなかった。「日本人はチーズを残す人が多いので、外してもらいました」と添乗員氏は説明した。チーズはワインと同じ産地のものを選ぶと良いと聞いていたので大いに期待していたのだから、これはまことに余計なお世話であった。余計なことといえば、マドリッドからセビリヤまで列車にのると、車内サービスで食事が出る。にもかかわらず、洋食より和食がよいだらうと添乗員氏は幕の内弁当をわざわざ、別に差し入れてくれた。同行の諸氏も、別に洋食に飽きた風には見えないし、洋食のほうがよほど美味しかった。せっかく外国に来たのだから、地のもの（例の menu reader によると、local dish という）を食べればいい訳で、コンビニ弁当のような和食はかえってありがたい迷惑という他はない。

## もう一つ

僕の無理を聞いて松延さんが面白い文を前号に書いてくれた。その中でご自分の奥さんをクサンチッペと呼んでいるが、これは僕が使ったのを彼も利用したらしい。僕の家では平気で通用するが、奥さんはご存知だったのだろうか？ クサンチッペは、かのギリシャの聖賢ソクラテスの妻であり、悪妻の代名詞である。ソクラテスは口やかましきこと井戸端にいるようなり、と言ったという。TV 番組にウルルン滞在記とかいう番組があり、最近ギリシャのトルコ寄りの島が出てきた。それによるとホームステイ先の奥さんと旦那が毎日がんがん言い合うらしい。もっとも大きな声でまくし立てるのはいつも奥さんで、旦那は小さくなっていったという。これぞクサンチッペ vs ソクラテスの構図である。もしかしたらクサンチッペはこの地方の出ではないだろうか、と思わせる話であった。僕が読んだ本ではこんな話が載っていた。結婚はとにかくよいことである。君のように美しい人と結婚すれば幸せだし、まかり間違ってもクサンチッペのような人と結婚しても、哲学者になれる、と。(了)